

研究ノート

旧ソ連ペレストロイカ過程の息づかい： ロシア極東地域との定期的学術交流 (1984-1992年)からの所感

藤田 整

1. はじめに

昨年、発表した拙稿「関西地区とロシア極東地域研究者との学術交流（1984～1992年）」⁽¹⁾においては、前半部分は「学術交流の概要」として、交流発足の事情、国際シンポジウム開催にあたっての双方間での企画・連絡方法、有能な通訳の準備、経費調達の方法などについて述べ、後半は「資料編」として、8回にわたるシンポジウムの報告者と報告テーマの一覧を掲載した。この学術交流は現在もなお継続中であるから、拙稿は中間報告である。ただし中間報告にしても、上記拙稿は学術交流の骨格を示したにすぎず、内容面については、若干の記述をのぞいて、紙面の制約からやむなくほぼ全面的に割愛せざるをえなかった。したがって今回は、その割愛部分を補足しようというのが本稿執筆の動機である。

2. ウラジオストクへの入市問題

シンボリック的というか、エピソード的というか、日ソ双方間での問題解決法の実例として、われわれの学術交流史のなかで忘れることのできないのは、1987年におけるウラジオストクへ

の最初の訪問の経過である。

ロシア極東における最大の港湾都市ウラジオストクは19世紀の半ばに誕生して、まだ1世紀半の歴史をもつにすぎない若い都市である。しかしここは帝政時代から「浦塩」の名で日本人には特別の感懐をもよおさせる都市であった。ところがウラジオストクは第二次世界大戦の時期以降、ソ連の太平洋艦隊司令部の所在地という理由で、外国人については立ち入り禁止、ソ連人についても立ち入りには特別許可が必要という閉鎖都市となり、1987年当時、すでにほぼ半世紀が経過していた。禁止されると、かえって余計見たくなるのが人情というものであろう。1987年8月における私たちの第4回目の日ソ学術交流はソ連極東地域で開催という順番であり、当時われわれの間では、ペレストロイカもだいぶん進んだようだし、しかも私たちより早い時期にハーヴァード大学の一行が入市するとうわさも流れていた（事実としては彼らは結局ハバロフスクで足止めされ、ウラジオストク入りは成らなかった）、今回はいよいよウラジオストクに行けるのではないかという期待がふくらんでいた。渡航前における日本側の交渉担当者の口ぶりからも、そういうニオイを大いにかがされていた。ところが実際に現地に到着してみると、案内されたのは前回（1985年）同様、

(1)『アジア研究所年報』第5号（1993年9月）所収

旧知のナホトカ市内のホテルである。もうここまで来れば、地図の上では、目と鼻の先にある目指すウラジオストクは、視覚的には相変わらず水平線の彼方であって、当然、何も見えない。しかも連日顔をあわしているソ連側研究者の大多数は、他ならぬこのウラジオストクの住民なのである。こうなると日本側の参加者のあいだで急速に不満が高まってきた。

ナホトカに到着して3日目の1987年8月6日、その日の最初の日程としてソ連側のプログラム責任者であるN.G. ネハエンコ(敬称略、以下同じ)から、今回は、努力はしてみたが、ウラジオストク行きはほぼ不可能である旨、いわゆる「るる釈明」という雰囲気の説明があり、日本語に通じている彼の口からは責任上「ハラキリ」というような物騒な言葉までとびだした。日本側としても簡単にあきらめきれないので話は長引き、1時間半にわたって「行かせろ、いや無理だ」の激論がつづいた。最後のほうにネハエンコの指名で私見を聞かれたが、私としては日本側の世話役の一人でもある立場上、約束が違うと喧嘩腰にもなれず、「日本側としては、ウラジオストク宿泊が無理なら、日帰りであれば数時間でも見せてくれると、ずいぶん気持ちがおさまるのではないか」との発言をしておいた。

ソ連側も、さっそく一層の努力をしてくれたと思われる。当日の就寝直前、明日、日帰りでウラジオストクに行くということが決まり、日本側は喜色につつまれた。ナホトカからウラジオストクへの交通は、当時は海路を水中翼船で約2時間というのが最短コースで、バスで陸路を取るのとは2倍以上もかかり、路面も悪いとのことであった。ところが今度は自然が幸いしなかった。翌8月7日、いそいそと岸壁に出かけてみると、海が荒れているので、当日、ウラジオストク行きの水中央翼船は欠航とのことであった。なるほど沖のほうでは三角波のような白波

があちこちに見える。われわれは不運を嘆くほかはなかった。

こうして日本側一行は、ナホトカでの日程をおえ、8月9日夕刻、おなじみのチーホオケアンスカヤ駅発、鉄道としては世界最長とされるシベリア横断鉄道の末端部分をモスクワ方向へ逆進して、翌10日午前、ハバロフスク着、そこでのシンポジウム日程をこなしていた。そして、とうとう最後によい事が起こった。8月11日の午後、明日の夜行列車でウラジオストクに行く許可が下りた、ただしその時点では、切符はまだ入手していないとの連絡があった。しかしソ連側責任者のネハエンコは何やら自信ありげである。こうして翌12日夜、ハバロフスク駅で私たちが案内されたのは東ドイツ製の1等寝台の新車であり、われわれグループの専用となったので、珍しいことに一部に空室さえある。日本側の消息通の聞きだしたところによると、ナホトカでのシンポジウムに参加していたソ連側G氏の実兄が、ウラジオストクをふくむ沿海地方のソ連共産党第1書記(当時、政治的にこの地域の最高権力者)で、その人物の口利きでこうなったとのことであった。定員の半分程度しか乗車していない私たちの1等寝台車は、本来、ウラジオストク発モスクワ行きの高距離列車の編成車両としてハバロフスクに到着したところ、そこで突如1台だけ列車から切り離され、ウラジオストク行き列車にダイヤ外の車両として連結されて始発駅に逆送されることとなり、それに私たちが乗車したというわけである。寝台車乗務の人の好いソ連人係員は、この不思議なハプニングのからくりを解しかねていた。(ハバロフスクで突如、当該寝台車からの下車を命ぜられた、モスクワ方面に行くはずのソ連人乗客たちは、ハバロフスクから先をどうしたのだろう。旧ソ連では不足経済の一環として交通切符もまた一般に入手困難であるから、彼らは、鉄路にしる空路にしる、遅滞なく直ちに旅行を続

けるのは困難であっただろうと察せられる。)

こうして迂余曲折の末、私たちは1987年8月13日の朝、待望のウラジオストクに到着、写真では旧知の駅前広場に立っていた。当時はまだ閉鎖都市であったウラジオストクの市民は私たち日本人がやって来たことに別に驚く様子はなく、大多数はもちろん無関心であり、ごく少数、関心をしめした人々はそうじて私たちに好意的と思われた。私たちに許されたウラジオストク滞在時間は10時間弱であったから、当日、私たちは多忙であった。まず駅前広場のレーニン像に花輪を捧げてから、ウラジオストク・ホテルで朝食をとりながらソ連側と当日の日程を調整する。朝食後、都心の本屋にたちよって各自若干の書籍購入のうち、科学アカデミー極東支部評議会の学術書記長 V.A. アクリチェフを表敬訪問し、極東支部の活動概況を聞き、次いで隣接する地質学研究所の鉱物標本を見学する。鉱山業は、林業、漁業とならんで、ソ連極東地域の三大産業のひとつなのである。それから昼食となり、市境の丘陵上にある丸太づくりの民芸調レストランで、ご馳走になる。美味であった。ソ連側同僚には、われわれのウラジオストク訪問という目的達成を祝賀する気持ちがあったようである。午後は科学アカデミーの植物園に立ち寄ってから、ウラジオストク市長を表敬訪問し、市政の概況を聞いた。住宅建設が最大の問題であるとの説明であった。そして午後6時発の水中翼船でウラジオストクに別れを告げ、ナホトカに向かった。そのさい岸壁までソ連側の若手学者たちが見送ってくれたが、彼らはマイクロバスから船まで20~30メートル、私たちの海外旅行用トランクを運んでくれた。まるで職業的ポーターよろしく、しごく当然のように両手にトランクを持って運ぶのであるから、腕力が日本人の2倍はある。ちなみに、その日のウラジオストク滞在中のマイクロバスによる移動は、終始パトカーの先導つきで、VIP扱いで

あった。上述の寝台車の手配一件にかかわった例の党幹部の指示によるものと推察される。

こうして8月13日の午後8時頃、海路ナホトカに帰着、当日はナホトカ泊。翌14日、ナホトカを出航、8月15日午後2時、敦賀着で帰国した。

やや詳細に述べたが、以上のウラジオストク行き経過は何を意味するのか。①ペレストロイカ以前の時期には、ウラジオストクは既述の理由によりソ連有数の嚴重な閉鎖地域であり、そもそも外国人が行くというような問題は起こりようがなかった。また現在ウラジオストクは周知のように開放されているから、誰でも行くことができる。したがって以上の一件は両状況の谷間で起こった出来事であったがゆえに、やや複雑な経過をたどらざるをえなかった。②この一件には、大物政治家の強度の介入という、基本的にはペレストロイカ以前の要因が、決定的な力をもって作用している。③この一件を、ペレストロイカという旧ソ連から新生ロシアへの過渡期社会において作用する諸要因によって、いわば翻弄された私たちの体験として記録に残しておきたい。そこからはソ連・ロシア社会の性格について、さらに色々なことを発見できるはずである。

3. ソ連・ロシア社会における新しい 価値観への転換時点は1989年頃か

1985年3月11日に M.S. ゴルバチョフがソ連共産党書記長に就任以降、ソヴェト社会において転換的要因の動きが加速化され、その全体が周知のようにペレストロイカと呼ばれている。現在は、ポスト・ペレストロイカというか、なお市場経済化を基本的な構成要因とする新社会への移行期のさなかにあるわけであるが、ここでは、かの國の知識階級において、旧ソヴェト体制との決別が客観的に不可避である、換言す

れば、ソヴェト社会から新社会への転換過程が、すでに「引返し不可能な点(irreversible point; no return point)」を越えたと自覚されるようになったのは、いったい、いつの時点においてであったのかという問題を検討したい。

さらに、ここではまず自己の体験データを手がかりにして検討することになると、私の場合、問題をソ連極東地域という範囲に限定せざるをえない。そこで私たちの交流相手である学者たちを標本として考えてみると、「1989年頃」というのが、新しい「社会的価値観=社会観」への転換時点であったのではないかと思われる。論拠の第1として挙げておきたいのは、第5回目の日ソ学術交流のさいのエクスカージョン・プログラムとして、1989年8月27日、私たちはウラジオストク港外のピョートル大帝湾で、まる1日、科学アカデミー所属の小型船で、魚釣り、水泳、その他の舟遊びを楽しんだことがある。そのさい、現代政治過程の専門家である旧知のV.V. コジェーブニコフと何かのきっかけで話しこんだのであるが、彼がポツリとつぶやいた所によると、「私はいま非常に困っている。わが國はいったい、どうなるのか、さっぱり判らなくなった」と述べて、私には初めて見せるような真剣な表情をしたことが、深い印象として残っている。別に記憶すべきと心がけているわけでもないのに、私にとっては忘れられないシーンである。

こうして1989年という時点に着目すると、ここで傍証として指摘しておきたいのは、私たちの日ソ学術交流において、1988年が先方の都合で空白期となっていることである。1984年における開始以降、われわれの学術交流は、毎年1回開催が双方で取り決めた原則であり、今日まで唯一、この原則の破られたのが1988年という年である。すなわち1987年8月の第4回交流から、第5回は1989年8月開催というように、ちょうど2年の間隔がある。本来の原則にしたがえ

ば、第5回交流は1988年の8月頃に開催されるはずであった。日ソ間でテーマ、報告者および開催時期などについて合意が成立しなかったので、結果として開催できなかったわけであるが、当時、われわれ日本側にとって開催について特に支障はなかったのであり、むしろソ連側が話に乗ってこなかったというのが、結果的に1988年度は中止とされた理由である。当時、ソ連社会の流動的情勢が、社会心理的にも国際的な学術交流の実施を許さないほど、緊迫した状況にあったのではなかろうか。

以上、ひとつの傍証を述べた後、第2に指摘したいのは、第4回交流(1987年)まではソ連側において活発に発言していた人々のうち、比較的年配であり、またソヴェト学界における従来型の発言をしていた人々、換言すれば保守派または旧体制弁護派と見なされるべき人々が、第5回交流(1989年)からは、もう姿を見せなくなったか、または出席はしても沈黙を守るようになったという事実である。念のため例をあげると、I.S. マングートフ、A.S. レヴァイキンなどの人々がこれにあたる。この事実は単なる世代交代だけによって説明しつくせるものではなく、さらにプラス・アルファ、あえて言えば体制転換から取り残されたのだというような理由説明が必要とおもわれる。

第3に、研究者からビジネスマンなどへの転職者が出現しはじめた事実である。例えば、ハバロフスク所在の科学アカデミー経済調査研究所の渉外部長として、第2回交流(1985年)から第4回交流(1987年)まで毎回出席し、しかも大いに活躍していたV.G. スモリャクは、第5回交流(1989年)のさいには、すでにビジネスマンに転身しており、旧職時代よりも上等の車に乗って私たちに挨拶におとづれた。また、われわれの日ソ学術交流についてのソ連側の提唱者であり、そのうえ当初より一貫してソ連側の窓口担当者であった上記ネハエンコは、第5

回交流（1989年）を最後として姿を消し、そのつぎにソ連極東地域で開催された第7回交流（1991年）のさいには、ビジネスマンに転身したとのことで、われわれの前に姿を現さなかった。そのほか少なくとも一時的に政治的職務についたものとして、ウラジオストク所在の科学アカデミー海洋経済研究所のV.S. クズネツォーフは、1990年、40歳そこそこで一介の研究者から一躍、沿海地方の知事に選任された。これなども旧ソ連時代には考えられなかったハプニングである。もっとも彼は、一時、虚をつかれた形のプロ政治家たちが我にかえて、アマチュア政治家の彼に反対する策動を強めたため、結果的には2年前後で知事の座を下りざるをえないことになった。要するに、この種のことがかなり広範に生起するというのは、当該社会成員の意識の転換を表現するものと思われる。

以上、私自身の体験に依拠して、ソ連・ロシア社会における新しい価値観への転換はどの時点であったかを検討し、極東地域においては1989年頃ではないかと指摘したのである。もとより旧ソ連、そしてその一部としてのロシアのような広大な国土において、この種のことには当然時差が存在するであろう。いずれソ連・ロシア社会の全体について、以上の問題について各種の見解が提起されるであろうが、そのさいの比較検討の一助にするため、このささやかな記述をのこしておきたい。

4. 工場および諸施設の見学記

(a) 最初の訪問時の雑感（1985年）

私たちの学術交流の以前に、個人として私はナホトカを数回通過したことがある。しかし、それは港から直接にチーホケアンスカヤ駅にいたり、鉄道でハバロフスクに向かうというコースであったので、ナホトカ市内については、港から駅までの10分前後のバスからの見聞以外に

何も知らなかった。第2回目の交流はナホトカで行われることになったので、私たちは1985年8月16日、敦賀発のバイカル号でナホトカに向かった。この船は当時のソ連の極東船舶公団所属で、船籍はウラジオストクにある。船内を散歩中、この船の「安全運航証明書」なるものが、入口のホールの壁に麗々しく掲示されているのが目についた。何気なく見入ると、1983年7月にウラジオストクで発行され、証明書の最終部分に1年間有効と記載されているので、私たちの乗船時の1985年8月現在、とっくの昔に失効している。

この第2回交流時の8月18日は日曜日であったので、午後は海水浴ということになり、ナホトカ港から15キロメートルほど北方の海岸に連れていってくれた。水温はかなり低めで、海水は予想以上に汚れていた。日本の海水浴場的な設備は何もない。海水浴をしている入江のような場所の入口に、赤地に白文字の立札があり、「止まれ、国境地帯につき水浴など禁止」と書いてある。しかし、その横を通り抜けて、主としてナホトカ市民であろう、数百人が水浴を楽しんでいた。私たちも他ならぬ市役所幹部の案内でまた同様であるから、「いったい、どうなっているのか」という感じはする。

(b) ヴォストーチヌイ港（1985年）

第2回交流時の1985年8月20日の午後、ヴォストーチヌイ港を見学した。この港は、ナホトカの北方、バスで2時間ほどの行程にあり、シベリア・ランドブリッジの東端にあたる。極東地域における貨物量の増大にともない、既存のウラジオストクおよびナホトカ両港における処理能力に限界がみられ始めたので、当時における最新設備をそなえた港として、1971年に建設が開始され、73年より第1バースが稼働を開始した。以後、1975年に100%自動化されたチップ用バース、78年には年間500万トンの処理能

力をもつ石炭バース、83年には木材バースおよび第2コンテナ・バースが完成し、そして見学時の1985年末には第3コンテナ・バースが完成予定とのことであった。1986~1990年にわたる第12次5カ年計画期には、年間処理能力250万トンの穀物バース、能力500万トンの第2石炭バース、能力250万トンの化学製品バースの建設が予定され、総合計画によると最終的には64バース、年間処理能力4800万トンの港湾設備の整備が目標とされているが、見学時点では既設1700万トンであった。

Q & Aにはいって、①自動化関係のコンピュータ設備について、ハードはソ連製第4世代のSM4であるが、ソフト・プログラムは外国製である。②従業員数は650名であるが、貨物取扱量がほぼ同規模のナホトカ港では7倍の従業員が働いている。③固定設備の評価額は2億5000万ルーブルである。④最近は年間、20~25カ國の船籍の船が入り出しているが、数量的には第1位が日本で、コンテナ船、ほか、第2位はギリシアで、石炭船、ほか、第3位はフィリピン、第4位はシンガポール、である。⑤港湾建設に参加した日本企業としては、三井系、三菱系、ほかに石川島播磨などである。⑥現在、最大15万トンの船までが入港可能であるが、昨年(=1984年)入港した船の平均トン数は2万8000トンであった。など。なお、私たちの見学にさいし対応してくれた管理課長は30歳代後半と見うけたが、テキパキと実務的で有能な感じであった。

(c) (ハバロフスク) ダーリ・エネルゴマシ工場 (1987年)

1987年8月12日、第4回交流のさいのハバロフスク滞在時の最終日の午後、ダーリ・エネルゴマシ工場を訪問した。⁽²⁾ ただし生産の現場

は見せてくれず、工場本部の応接室で工場長以下、計4名に面会して、話を聞いていただけであった。生産現場からシャットアウトされたのは、日本人同僚の話では、ここが軍需工場だからである。しかし面談はそれなりに興味ぶかかった。計4名の対談者とは、工場長、工場の共産党支部書記長、労働組合長、コムサモール書記長で、これらの人物が、私たちから見て工場長の左側に、こういう順序で着席していたが、この順序は明らかに彼らの工場内での序列を示していると思われる。

工場長による工場概要の説明によると、この工場は50年前に建設されたとのことだから、それは1930年代の後半であり、明らかに当時の東北アジアにおける国際情勢の緊張と関係があっただろう。現在、生産中の製品は、ガスタービン、コンプレッサー、その他の重機械とのことである。軍需品については、もちろん完黙であった。なお消費財としては、乳母車、子供用机、めがねケース、その他である。計画としては1990年までに、工場での生産高の95%を「国際水準」のものにする。また1993年までに、すべての従業員に社宅(クヴァルチーラ)を與える予定とのことであった。

工場側とのQ & Aにはいり、第1に消費財関係については、①生産額は全体の10%弱、②消費財の生産開始は約25年前からで、そのキッカケは政府決定によるとの話であった。私の記憶では、軍需工場でも一定量以上の消費財を生産すべしとのソ連政府決定は1970年代の半ば頃に出されたものと考えていたが、1960年前後から、すくなくとも一部の工場については、その種の指令が出されていたらしい。③消費財の生産品目の決定については、極東部の上部機関の勧告による。したがって消費財用の材料についても、主製品生産のさいの廃物利用というのはごく一

(2) 昨年発表の上記拙稿(注1)122ページにおいて「ダーリ・エネルゴプロム工場」としたのは誤りで、

正しくは「ダーリ・エネルゴマシ工場」である。

部のみで、大部分は新規購入とのことであった。

第2に、従業員数については数千名が働いているが、正確な数字はご存知の理由により公表できないとの答であった。(先方は、われわれが、ここは軍需工場ということを知っていると見なしていた。実際には訪問前から、そこまで察知していたのは仲間のうち1～2名に過ぎなかったが。)従業員はおおむね工場周辺の社宅に住んでいる。

第3に、工場長の説明にあった「国際水準の商品」とは、何を基準に決めるかについては、指標ごとに(例えば、単位エネルギー消費量、その他)しかるべき外国製品と比較して判断する。そのさい耐久性も、もちろん主たる指標の一つである。

第4に、技術革新について、外部の研究機関との関係としては、キエフ、モスクワ、レニングラード(現サンクト・ペテルブルク)所在のものなど、ソ連全体で30位の機関と関係がある。また当工場の技術者の再訓練を、ハリコフ、レニングラードなどの研究機関で定期的に行っている。

第5に、「ネスーン」(原材料などの私用のための不正持出し)の状況については、以前にはかなりあったが、現在は減っている。その一因としては、従業員所有の消費財の故障修理、キーの複製、その他について、工場内に公式にその種の需要のための職場を設けたことも影響しているだろうとされた。

第6に、ゴスプリヨームカ(国家収用制=政府注文の企業生産物を「本格的な」品質検査を経た後、政府が買上げる制度。ペレストロイカの過程で導入された)の状況については、この工場は1986年10月より移行した(一般には1987年1月1日より)。そのさい従来、当工場所属の製品検査係の70%が、このための新組織に所属変えとなった。ついこの間まで同じ工場でも同僚であったものが別組織に移って、今度は

以前の職場の製品を検査するという、いわば外部の監督者的立場になっているわけであるが、そのさい人間関係上、ストレスはないのかという日本側の質問に対し、先方の答は、ソ連には「友情は友情だが、お勤めはまた別」(Дружба—дружба, служба—служба)との諺もあって、そういう懸念はない。

第7に、労働組合長への質問の回答として、労働条件向上などの問題で工場の経営幹部と衝突するということはない。ただ個々の現場の職長などには、労働安全について理解のすくない者がおり、意見の衝突することがあるとの話であった。

(d) (ハバロフスク) ヴァストーク縫製企業合同(1989年)

第5回交流時の1989年8月24日の午後の時間を割いて、ハバロフスク所在のヴァストーク縫製企業合同を見学した。この企業長は60歳前後と見うけられる女性で、まず企業長室で企業概要の説明をうけた。彼女の話によれば、この本社工場は1928年に創立され、それを基礎にして1963年に現在の企業合同が設立された。ハバロフスクには2箇所にも工場があり、また郊外の数カ村にも工場があるが、ソ連極東部で縫製関係では最大の企業の一つである。この企業の製品は主として子供用である。従業員数は約2,500名で、その大部分は女性で、そのまた80%は若年である。5カ所に幼稚園をもち、この面の問題はすでにほぼ解決した。さらに食堂、寮および診療所をそれぞれ3カ所に設置しており、またピオネール・ラーゲリも持っている。また、この企業には1989年1月1日付で新しいホズラスチョート(独立採算制)が導入され、その後金融問題が改善された。さらに昨年(=1988年)より社会主義諸国(北朝鮮、中国、ヴェトナム)との協業関係が設立された。日本との協業も希望しているが、いまのところ具体的

な話はない。

このあと、これまた女性の技師長の案内により、3~4階建ての工場内をほぼ一巡、見学し、次いで、また企業長室にもどってから、Q&Aに移った。①現在の生産高は年間4500万ルーブルである。製品は主として子供用であるので、生産高は通常の場合よりも割安に評価されている。このうち国家発注は生産高の約52%である。なお利潤率は15~20%となっている。②平均的な賃金は月額280ルーブルで、最高は400ルーブルである。なお労働力の流動率は年間約15%である。③生産設備(動力ミシン、その他)はソ連製と外国製(日本製を含む)の両方があり、その平均使用年数は12年間である。④設備更新については、現在、企業手持ちの発展ファンドは70万ルーブルである。他方、いま導入中の新設備(その30%は、日本、西ドイツ、ハンガリーなどの外国製)の総額は140万ルーブルであり、資金の不足分はクレジットをうけることになっている。なお近くホズラスチョートの第1モデルから第2モデルに移行する予定である。しかし、それは「完全ホズラスチョート」ではないし、ソ連全国についても完全ホズラスチョートはまだどこにも導入されていない。ちなみに、この企業の主製品である子供用衣料の価格は政策的に割安に設定されているので、収益低下の見返りに政府から補助金が給付されている。⑤工場直営の商店が80年代にハバロフスクの中心街(鉄道駅の近く)に開設された。それは、大人向きの商店であるが、近く子供向きの商店も開きたいと考えている。ピロビジャン、またコムソモーリスクにも工場があり、そこにも商店が付設されている。⑥工場自体にもデザイン部があるが、外部から、例えばモスクワ、ハバロフスクなど所在のデザイン専門組織からもデザインを購入する。ファッション・ショウも開催している。⑦ベトナムより4年間の年間で研修生を受け入れている。研修生にはソ連人と

同水準の賃金を支給している。(工場の現場案内の途中、多数の若いベトナム女性を見つけたが、技師長の話では、彼女らの学習と労働にたいする意欲は、企業の管理部にとってはやや期待はずれで、評価は低いとのことであった。)最後に、⑧人事面の話にうつると、現在の企業長は1986年に上部機関の指名により選任された。現行法によれば、企業長は3年ごとに再審査されるとのことであった。また、この企業からは州ソヴェトに2名の代議員が選出されている。

(e) (コムソモーリスク) 石油精製工場(1991年)

第7回交流時の1991年9月28~29日の両日、コムソモーリスク・ナ・アムーレ市およびその周辺の若干の施設を訪問した。同市一帯はソ連極東部における最大の軍産複合センターであり、当時、依然として外国人立入り禁止地区であったので、入市は特別許可による。石油精製工場は9月29日に見学した。ここはソ連極東部に2箇所しかない精製工場の一つで、極東地域の需要の37%を供給し、もう一つの精製工場はハバロフスクにあるとの説明であった。生産開始は1942年で、サハリン産原油の精製にあたり、この方面のパイプラインは1947年に完成した。1980年から鉄道輸送により西シベリア産原油の精製を開始したが、現在、こちらの方向はアンガルスクまでパイプラインが完成している。この工場の現在の業務内容は、①サハリン産原油の精製、②西シベリア産原油の精製、③石油コークスの生産、の3種である。従業員数は900名で、その内訳は直接生産過程に400名、事務職に120名、管理職に100名、その他はインフラ関係(保健、託児所、給食など)との説明であり、その平均賃金は1991年6月から1,000ルーブルである。年間の原油精製量は600万トンで、生産高は見学時の前年の1990年には約7億ドルと外貨表示の説明であった。

工場幹部によると同工場の問題点としては、

第1に、西シベリアからの鉄道による原油供給は距離が6,000キロと長大で、ゆえに不定期、不安定となりがちであること。第2に、この工場には現在、高オクタン・ガソリン精製設備がない。したがって技術革新の必要があり、合併会社の設立を計画している。改造費の見積は約2億5000万ドルである。第3に、製品の輸出問題であり、当工場はペレストロイカ政策の一環として、生産高の10～15%を直接に輸出する権限を與えられたのではあるが、輸送するタンカーの手配ができないので困っているとの話であった。全体の印象として、この工場の生産設備は、旧ソ連のご多分にもれず1942年の工場創設以降、ほぼ50年間も更新されていないとのことで、素人目にも設備の老朽化はおおいがたい。一見、旧式のガソリン・スタンドを大型にしたような感じで、ポンプ室など、デコボコのコンクリートの床には、どこからか大量にもれ出たガソリンのたまりが常時できており、強いガソリン臭がたちこめて耐え難く、すぐ外に出て、新鮮な空気に触れたいと思わせるような状況であった。

(f) (ハバロフスク) 商品取引所ビゾン (1991年)

第7回交流時の1991年9月27日、ハバロフスク都心所在の新設の商品取引所「ビゾン」を訪問した。この取引所の建物は旧ソ連共産党の地区党学校の校舎を転用したもので、かつての講堂が立会場に模様替えされていた。取引所「ビゾン」がロシア連邦政府から「取引所活動の権利・ライセンス第20号」を與えられたのは、私たちの訪問直前の1991年8月15日のことであり、ライセンスの発給者はロシア連邦の「反独占政策および新経済構造援助」国家委員会である。このライセンス状によれば許可された取引品目は、木材と建設材料、エネルギー製品、農産物、原材料・機械類、食料品および消費財となっていて、かなり広範である。訪問当時の立会日は毎週2日とのことで、立会場には数台のパソコン

またはワークステーション級のコンピュータが設置されていた。訪問時点においては開所以来まだ1カ月そこそこで、取引量は大了ものではなかったが、石油の取引などをやっていた。取引所長は30歳代後半と見うけたが、きわめてエネルギーな、旧ソ連の基準ではいわゆる新人類的人物と思われた。

5. 結語にかえて

本稿は、冒頭に指示した昨年発表の拙稿とセットをなす。その拙稿後半の資料編には、私たちの8回にわたるシンポジウムのテーマと報告者の一覧が掲げている。今回、報告記録の若干をチェックし、改めて整理するに足るものがあるかについて検討してみた。しかし、シンポジウムの始まった1984年以降は、周知のようにソ連社会の大変動の時期、いわば「現実が研究を追い越し」、研究の陳腐化があまりに急速に進んだ時期であったため、すくなくとも現在、筆者は、報告自体の詳細なフォローについては興味を失っている。むしろ、副産物としての各面の見聞に記録すべきものがあると考えた。その成果が本稿に他ならない。私たちの日ソ＝日ロ間の国際的学术交流の最大の成果は、結局、相互間における信頼関係の醸成であったと言えるのではないか。ここ200年間、とりわけ最近100年間の近・現代史をかえりみる時、日ロ間においては、これは、とりわけ貴重であると信ずる。

(後記) 本稿についても前稿(注1に記載)同様、この交流について終始、主導的努力を傾注された藤本和貴夫・大阪大学教授(兼、大阪経済法科大学アジア研究所・客員研究員)に目を通していただき、若干のコメントを頂戴した。記して感謝の意を表す。しかし、ありうべき誤りについては、すべて筆者の責任である。

(1994. 9. 9, 脱稿)